

JANU

27

December 2012

【ジャーナル】 The Japan Association of National Universities

国立大学協会情報誌

Quarterly Report

〔特集〕 有機的連携で未来を拓く

異分野ネットワーク

Opinion

宮崎美子

女優

支部通信

発見! 国立大学

—MUSEUM & CAMPUS—

今、学生は!

宇都宮大学 大嶋悠也

カフェで交流の輪を広げ
地域をともに盛り上げる



有機的連携で 未来を拓く

国立大学は、教育や学術研究、産業・文化振興のすべてにおいて、社会に貢献してきました。社会変化の大きい現代では、日本の知の創造拠点である国立大学の任務は、ますます重要になります。今後も、公共性を生かして、産学官の連携を構築し、多様なアプローチで、卓越した人材を育成するために、国立大学は、六つの公共的役割を果たしていきます。

日本と世界を持続的に発展させる

次世代を担う卓越した人材を育成する

新たな知の創造拠点として
世界のイノベーションを導く

国民の健康の増進と
医療・教育の向上を図る

産学連携を通して
産業の発展と人材養成に寄与する

地域社会を活性化し
文化・芸術・スポーツの中核拠点となる

【特集】有機的連携で未来を拓く

異分野 ネットワーク

公共的な役割を担う国立大学では、産業界や自治体などと連携して、新たな産業を興し、新しい領域や地域で活躍できる人材の育成を行っています。今号の特集では、自らの得意分野を、他の大学や企業・地域と協力して広める試みや、地元に着目した連携とその貢献、産学官のネットワークと研究の拡大を担う、中核拠点としての取り組みを紹介します。

広く知を集め育む

大学と現場の新たな連携で
研究力・実践力を強化する

全国の国立大学では、培った研究成果を広く実社会に生かすため、これまでとは異なる新たな領域・分野との連携を進めて、研究と教育の幅を広げています。現場や異分野との協力によって進行している研究や、人材育成の取り組みを紹介します。

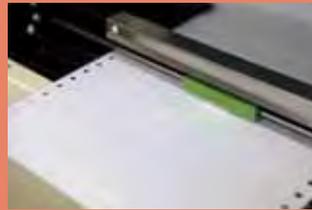
障害者教育の方法を 全国の大学と共有 筑波技術大学

筑波技術大学は、聴覚・視覚障害者のみを受け入れる国内唯一の高等教育機関です。現在、一般の大学に入学する障害学生が増加しており、大学側は一人ひとりの学生の状況や、支援に対するニーズを把握する必要があります。そのため、同大学では、「聴覚・視覚障害学生のイコールアクセスを保障する教育支援ハブの構築」事業を展開し、創立以来培ってきた教育ノウハウを全国の大学に提供しています。

聴覚系の支援としては、教員や職員に対する研修、パソコンノートテイク（授業での教員や学生の発言などを速記する授業支援者）の養成活動などを行っています。また、聴覚障害学生や教員を対象にした、「デフ・スタディーズ（ろ



聴覚系の支援として、授業中の教員や学生の発言を視覚化するため、パソコンノートテイク（上）が速記入力し、ほぼリアルタイムにモニターに映し出される（下）



図形点訳ソフトで作られた点字データ（右上）を印字する点字プリンタ（右）

http://www.tsukuba-tech.ac.jp/departmen/rc/sharing_center.html

う者学）コンテンツも提供しています。これは、「手話」、「テクノロジー」などの7分野の講義を手話と字幕で行う動画コンテンツです。視覚系の支援では、点字図書を作成・提供や、点訳・音訳者育成の講習会を開催する他、ルーペな

どの教育支援機器を他大学に貸し出し、評価や活用事例などをデータベース化して共有しています。同大学は、今後もコンテンツ開発や情報提供体制の整備を進め、障害者の社会的自立と高等教育のバリアフリー化に貢献します。

撮影／家老芳美

互いの強みを生かす 私大との共同大学院

東京農工大学

東京農工大学は2010年度、早稲田大学とともに、国内初の国私連携による共同大学院「共同先進健康科学専攻」を開設しました。同専攻は、生命科学・食科学・環境科学を柱領域として、健康科学を研究する分野融合型の教育プログラムを構築しています。東京農工大学からは、生命工学や農学などを専門とする教員、早稲田大学からは、医科学やリスク管理学などを専門とする教員が参画しています。同専攻は、医薬・食・環境などの分野で国際的に活躍する人材の育成を目指しています。



二大学共同のオリエンテーションの一環として、東京農工大学の動物医療センターで最先端医療機器を見学する新入生

<http://www.tuat.ac.jp/~tw-kyodo/index.html>

企業・教育機関とともに がん治療研究者を養成 群馬大学

重粒子線がん治療法は、放射線抵抗性のがんに強い威力を持ち、また、副作用が少ないことから、患者の体の負担も軽い、革新的な治療法です。

群馬大学は、この治療法のパイオニアとして、群馬県と共同で重粒子線照射施設を建設し、2010年より、400人以上の患者の治療を行ってきました。県内医療機関と連携して施設を効果

的に活用することで、群馬医療圏に高度な統合的がん医療体制を構築しています。

技術・研究面でも、サブミリ重イオンビーム高精度照射技術、医療用コンプトンカメラ技術などの開発や、重粒子線医学・生物学の研究に取り組んでいます。

人材育成活動にも力を入れ、2011年度には、博士課程において、「重粒子線医工学グローバルリーダー養成プログラム」を設置しました。医学系の学生や臨床研修医などから、優秀な人材を選抜し、国内外の大学組織や、医療機器開発産業、研究機関と協力して、実践的な指導を行っています。

放射線腫瘍学分野、重粒子線治療関連企業の研究開発分野、物理工学・医学生物学分野におけるリーダーの育成を目指しています。



群馬大学が群馬県と共同で建設した重粒子線照射施設内にある、照射治療で使用されるシンクロトロン加速器

<http://heavy-ion.showa.gunma-u.ac.jp>

教育委員会と連携し 地域の理科教育を強化

北見工業大学

北見工業大学は、小中学生の理科離れを食い止めるために、北見市教育委員会と連携し、現在三つの取り組みを進めています。

一つ目は、同大学の教員と中学校教員が、実際に学校現場で使用される、中学生向け電子教科書の光学実験の章を作成する共同研究です。二つ目は、小中学生対象のものづくり体験学習や工作教室の開催です。参加者の、ものづくりや工学への関心を高め、進路選択の一助となるのが目的です。三つ目は、同大学の技術員による、小学校教員向けの研修です。新学習指導要領に対応した内容で、教員の実験技術向上を図ります。

同大学は、これらの取り組みで小中学生の基礎学力並びに、地域大学への進学率のアップを目指し、技術革新を担う人材育成という社会的要請にも応えていきます。



工作教室で、工具の扱いを習いながら、木材を加工する小学生

http://www.kitami-it.ac.jp/public_relations/kyotei_1_19.html

地元企業と 産業界リーダーを育成 富山大学



参加者は工場見学で、現場の技術者と意見交換することができる。産業界の現状や課題についての情報共有が期待される

富山大学は、2011年度に、現役の技術者を対象に、「次世代スーパーエンジニア養成コース」を開設しました。団塊の世代の大量退職により、中小企業の若手技術者育成が困難になっている現状を踏まえ、地域ぐるみで次世代の産業界リーダーを育成しています。

同大学の教員や地元企業のベテラン技術者が担当する講義は、受講生が働きながら学べるよう、木曜日夜間と土曜日に開講し、2012年度は、各企業から選抜された約150人が受講しています。

企業側からの意見を積極的に取り入れ、実践に役立つカリキュラムの強化も行っています。

<http://www3.u-toyama.ac.jp/manabina/>

地産地消の新時代

地元のニーズを的確にとらえ
産学官で地域を支える

地域に存在する問題の解決や、新たな産業の創出へ向けて
国立大学では、地域の企業や自治体と連携を組んで、研究開発や支援を進めています。
地域に密着し、地元の声を聞きながら、町の活性化に努めます。

自治体と企業、大学間のネットワークの ハブとして、地元産業を興す

岩手大学

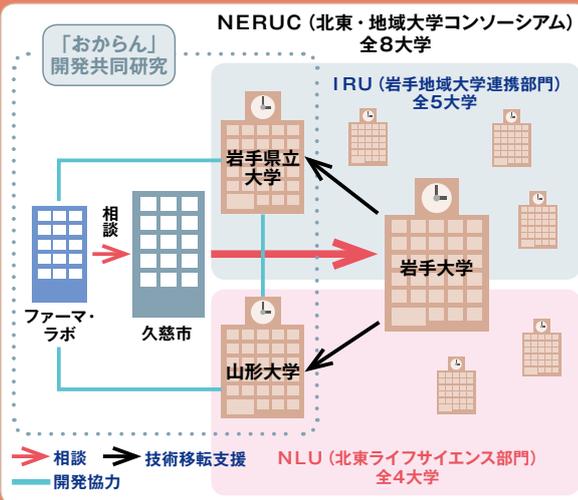
岩手大学では、久慈市から同大
学に出向している共同研究者から
の相談を受け、東北・北海道地域
の8大学で構成されるNERUC
(北東・地域大学コンソーシアム)
のネットワークを活用し、「おから
ん」の開発に貢献しました。

「おからん」とは、おからを原料
にした低カロリー主食用食品(お
からパン)です。おからの開発
は、久慈市の薬局ファーマ・ラボ
が、地域住民の健康維持・改善と
製造工場の建設による雇用創出と
いう、地域の切実なニーズを解決
するための商品開発を久慈市に相
談したことから始まりました。

久慈市共同研究員の相談を受け
た同大学では、課題の内容が学内
研究者の専門分野とはマッチしな
かったために、NERUCを通じ

て協力を呼び掛け、山形大学と岩
手県立大学の協力を得ました。ま
ず山形大学が成型を担当し、岩手
県立大学が栄養価と味の研究を
進めました。そして岩手大学は企
業との条件交渉やライセンス契約
書作成を支援(技術移転支援)し、
3年かけて商品化に至りました。
今回のおからん開発では、地元
の実情やニーズを把握している共
同研究員のコーディネイトとNE
RUCの構成大学の産学官連携
コーディネーターが、日頃から構
築しているネットワークを活用し
た結果、地域の要望を形にするこ
とができました。今後も、これま
でに培ったNERUCのネット
ワークを生かし、地域の共同研究
員とも連携して、地元のニーズに
的確に応える貢献を考えています。

「おからん」開発の
ネットワークとNERUC



おからを原料とした「おからん」。おからの成型という問題は、山形大学がプラスチック成型の原理を応用して解決した

<http://www.ccrd.iwate-u.ac.jp/neruc/>

撮影/金澤篤宏

企業とタイアップして 在宅患者を支援

旭川医科大学

旭川医科大学は在宅患者支援のため、ソフトバンクBBなどと連携し、患者の携帯電話を認証用の「鍵」とする本人認証技術や、モバイル回線を用いた患者情報共有技術及び双方向コミュニケーション技術を開発しました。これは、同大学が地域間の医療格差を解消するために1994年から推進している、ICT(情報通信技術)を活用して遠隔地の医療スタッフを支援する遠隔医療のノウハウを生かしたものです。

退院患者が、通院中から退院後の自宅療養中も、手術後の経過観察や生活習慣の改善指導を行える、切れ目のない医療支援体制が確立しました。



自宅療養中の患者が測定するバイタル情報を確認しながら、旭川医科大学の医師(左)が遠隔からフォローアップする様子

http://www.asahikawa-med.ac.jp/index.php?f=show_topic&topic_cd=593

産学官で情報を持ち寄り 高齢者の営農を支える 奈良女子大学

奈良女子大学では、高齢化の進む農業経営の問題に、農学・工学・スポーツ科学・社会学の異分野の研究者が共同で取り組んでいます。「高齢者の営農を支える『らくらく農法』」の開発「プロジェクトは、過疎化・少子高齢化の影響を受け、地域社会の衰退が課題の奈良県吉野郡下市町栃原地区が対象です。地域の現状調査から始まり、取り扱いが楽な農作業機器の開発、高齢者の体力に即した栽培法の開発など、産学官が各自の得意分野を生かし、情報交換をしながらプロジェクトを進めています。

高齢農業従事者が生き生きと農業を営める環境を構築し、全国の山村の活性化の一助となることを期待されています。



連携企業が開発した、高齢者でも安心して使える電動農作業車「らくらく号（試作車）」。
現在、軽量化など更に開発が進んでいる

<http://www.nara-wu.ac.jp/scc/tochihara/messege.html>

地域の小学校と連携し 発達障害児の支援プログラムを開発 埼玉大学

埼玉大学では2009年度より、地域の小学校・幼稚園に在籍する発達障害児の療育活動を展開しています。学校現場では、LD（学習障害）・ADHD（注意欠陥・多動性障害）などの発達障害児への対応が緊急の課題であり、その指導法の開発と高度な実践力を有する教員の育成が急がれています。

同大学では、附属特別支援学校に開設した特別支援教育臨床研究センターに大学院生を参加させ、発達障害児へのグループ指導を試みつつ、学校現場と連携して支援

プログラムの開発を行っています。

更に、臨床心理士などのスタッフが中心となり、療育活動に参加している児童の保護者との話し合いを定例化させることで、保護者同士の横のつながりが形成できています。

こうした取り組みが、参加した保護者からは高い評価を得ています。



附属特別支援学校に開設された、特別支援教育臨床研究センターの様子。大学院生がグループ指導に加わる

<http://www.saitama-u.ac.jp/fuyou/shien/1-toppage.html>

大学育成ブドウを用いて 地域ブランドのワインを開発 香川大学

香川大学では、地元のワイナリーと協力して、「さめきブランド」のワイン開発を2001年から行っています。

ワインの原料である加工用ブドウ「香大農R-1」は、同大学の農学部で開発された新品種のブドウで、種苗登録がなされた特徴的な果実品質を持ち、1989年から育成されています。このブドウは高温による着色障害が発生せず、既存赤ワインの2倍のポリフェノールを含むにもかかわらず、渋みが少ない品種のため、ワイン愛好家の底辺拡大が期待できます。また、生産者にとつ

ては房作りや摘粒が不要で、管理作業が簡便になっています。

同品種を使用したワインは、2006年に製品化されました。このブドウから作られた「さめきブランド」ワインは、醸造本数がフルボタル約7000本、香川県下のみのも販売です。協力先のワイナリーにしかないオンラインワン製品となっています。

今後も大学内外の専門家・協力者、地域企業などと連携して、新規製品の企画開発、ブランド化戦略を検討し、第二期の製品開発や販売戦略などを展開していきます。



香川大学の知的財産シーズであるブドウ品種「香大農R-1」からつくられたさめきブランドの赤ワイン「SAUVAGEONNE SAVOUREUSE 2011（ソヴァジョーヌ・サヴルーズ）」（右）と、醸造したワインの瓶詰作業（左）



<http://www.kagawa-u.ac.jp/actter/wine/>

世界に貢献する連携の拠点

産学官で知恵と技術を結集
研究・教育の核となる

地域の中核となる 分野融合型の研究拠点 神戸大学

神戸大学は、2011年度、ポータルアイランド地区に「統合研究拠点」を設置しました。分野を横断し、全学的な規模で、分子レベルから宇宙に至るまでの、広範囲なスケールの学術研究を推進することが目的です。

現在は、同拠点の隣に位置する理化学研究所計算科学研究機構（AICS）のスーパーコンピュータ「京」を活用した創薬手法開発や、兵庫県と共同でCO₂分離膜の実用化を目指す取り組みなど、10の研究プロジェクトが進行中です。

地域の中核となる研究拠点として、最先端の研究成果を世界に発信します。



研究プロジェクトの一つでは、「京」の計算シミュレーションの結果を視覚化する技術を研究する。写真は研究に使用する3次元可視化装置
<http://www.kobe-u.ac.jp/kuirc/>

複数の大学や研究機関・企業などが、共同で世界をリードする研究に取り組んでいます。国立大学がその拠点となることで、より大きなプロジェクトの進行が可能となります。

産学官で バイオ研究の発展に貢献 鳥取大学

鳥取大学は、2011年度に鳥取県や科学技術振興機構（JST）などと連携し、「染色体工学技術」の産業及び医学応用研究を行う産学官共同研究施設「とっとりバイオフロンティア」を開設しました。

同大学は、研究開発と同時に技術者の養成を推進し、また、企業と連携して大学の先端技術シーズの産業化を実行します。

県とJSTは、同施設に對して、経済・人的支援を行い、地域活性化へとつなげていきます。

既に成果が上がった研究もあり、今後も、産学官の人的・技術的交流を通して、バイオ産業の発展に貢献していきます。



「とっとりバイオフロンティア」の最先端機器を利用して、実施される「バイオ人材育成講座」

<http://www.med.tottori-u.ac.jp/chromosome/>

東九州で連携し アジアの医療をけん引 宮崎大学

大分県と宮崎県から成る東九州地域には、血液・血管関連の医療機器の製造企業が集積しています。

宮崎大学は、この特色と現状を生かして、両県と大分大学や地域内の企業などと連携し、「東九州地域医療産業拠点構想」を策定しました。産学官で連携し、

- ① 研究開発の拠点、② 医療技術人材育成の拠点
- ③ 血液・血管に関する医療拠点、④ 医療機器産業の拠点、の四つの拠点づくりに取り組めます。

これらの取り組みにより、医療機器産業の発達及びそれに伴う地域活性化を推進し、医療分野でアジアに貢献する地域となることを目指します。



「東九州地域医療産業拠点構想」における四つの拠点

東九州地域で一丸となり、地域医療の活性化と国際医療交流を推進

宮崎美子

熊本大学を卒業し、女優の道を歩まれた宮崎美子さん。漢字検定1級合格やクイズ番組での活躍などで、博学ぶりも話題です。熊本市の「わくわく親善大使」も務める宮崎さんに、地方大学への期待と魅力を語ってもらいました。



大学の特長を打ち出し
地元の信頼と期待に応える
地方大学であつて欲しい

地元で就職を考えていた
熊本大学での学生時代

私が熊本大学の学生だった頃は、まだ男女雇用機会均等法はありませんでした。求人票に「女子も可」と書いてあるものが時々目につくくらいで、女性の就職が厳しい時代だったんです。一度、仕事に就いたら、一生そこでやっていこうと、それだけは決めていましたから、公務員や教職など、就職を考えて法文学部(現・法学部)の法学科を受験しました。

でも、学生時代は、のんびりしたキャンパスの雰囲気の中で、自分が将来どうしたいのか、まだよく分からない、どこにでもいるタイプの学生でした。ただ、熊本大学に進学した時点で、ずっと地元で暮らすのだと思っていました。

ところが3年生の終わりに、週刊誌の表紙に出たのをきっかけに、自分が何をやりたいのか分からなくなりました。この世界に入ってしまった。初めて人前でお芝居をした時のことなのですが、自分の気持ちと体なのに、こんなにコントロールできないものかととても悔しく、また、そ

撮影/鈴木理策

これからの時代は、一生勉強が必要 知識を得て新しい世界に接することは いくつになってもできる



こが面白くもあつたんですね。それで随分悩みましたが、もうちょっと続けてみようと思つたんです。

新しい挑戦を続けることで 揺るぎない自分ができる

「仕事は女優です」と人に言えて、この仕事が面白いと思えるようになったのは、20年ぐらいたつてからです。現場で皆と一つのものをつくり上げる面白さが分かるようになり、経験を積み重ねたことで小さな手応えが生まれて、ようやくやってきて良かったと思うようになりました。

仕事を始め、何事も続けることなんでしょうね。途中で辞めていたら、今の楽しさは味わえなかつたし、以前は10センチ先が見えなくて困つていたのが、今では見る角度を変えたり、少し引いて見たりと考える余裕が生まれるようになりました。演じる難しさの質も、違つてきていると思います。

また、役者の仕事は役ごとに違う人生を生きているので、常に新しい挑戦があるところにも面白さがあります。最近、母親役が多いのですが、現実には母親でない私にとって、それは挑戦です。踊る役がくれば踊りがチャレンジです。そういうことが重荷になることもありましたが、今は小さな挑戦を続けることを少しずつ楽しめるようになってきています。

女優の仕事以外にも、私は本当にいろいろなことをやってみたくて、ナレーションやクイズ番組など、さまざまなことをデビューの頃から、それこそ自分探しのようによつていきます。自分ができることをいろいろと試せるこの仕事に就いたことは、幸運だつたと思います。

そうして得た知識や体験は、演じる上で無駄になることは何一つありません。例えばアイドルの話題だつて、アイドル好きの子どもを持つお母さんの役がきた時に役立ちます。何でも知つていて損はないし、そういうことを面白いと感じるんです。ただ、今でも私は女優ですつて言うのは気恥ずかしいんですよ。

また一方で、女優というのは失敗すると容赦なく批判される仕事でもあります。公に恥をかって、それを重ねる仕事なのです。でも、そういう経験から、自分の中に、どれだけ恥をかっていてもここだけは譲れないという、それまで自分でも気付いていなかった、ぶれない自分の芯のようなものが見えてくるんです。仕事を通じて鍛えられて、揺るぎない自分というものが定まつたように思います。

大学で学んだ「学問」の仕方が 今も「学ぶ」時の基本

私は、大学でゆつたりとした時間を過ごしたおかげで、今の自分があ

宮崎美子 (みやざき よしこ)

女優。1958年、熊本県生まれ。熊本大学法文学部(現・法学部)法学科在学中に『週刊朝日』の表紙を飾り、ミノルタのテレビCMに出演。1980年、TVドラマで本格デビューし、1982年、卒業。映画や舞台、ドラマで女優として活躍すると同時にリポーターやクイズ番組などにも出演し、その幅広い知識で注目を集める。2012年4月から、話題の作家を招いてブックトークを行う「宮崎美子のすずらん本屋堂」の司会を務めるなど、現在も活動の幅を広げている。

なのですが、勉強しなかったという後悔もあって、数年前に漢字検定を受けたんです。その時に勉強するって面白いと思いましたが、知識を得て新しい世界に接することは、いくつになってもできると実感しました。また近頃は、「知っている」とはどういうことだろうとよく考えます。現代はインターネットなどで、分からないことは簡単に調べられますが、私には、そうやって得た知識が本当に「知っている」ことになるのかと疑う気持ちがあるんです。もちろん私もインターネットで調べたりしますが、それは自分の中では不確実な知識なのです。

今の私は、実際に自分で触れたり、人に会って話したりしてじかに感じ取ったことを「知っている」と言ってもいいかなと考えています。いろいろなことをできるだけ味わって、知りたいと思うんですね。

大学では、学問とは一次資料に基づいて、一つ一つ自分で調べるという手続きを踏むことが必要だと学びました。私は今でも、何かを調べる時には最初の資料に当たるようにしています。「学ぶ」とはどういうことを教えてくれる場所が、大学なのかもしれませんね。

これからの時代は、誰もが一生勉強していかないとはいけないと思います。学生時代だけ学ぶのではなく、

自分を少しずつ広げて、磨いていかないと、どんな職業に就いても伍していけないのではないのでしょうか。学生の皆さんには、自分が選んだ大学の先生や施設、そして時間を十二分に使い尽くし、自分のものにして、将来への土台をつくって欲しいし、食欲になって欲しいと思います。そして大学は、ずっとそういうものを、学生に与える場であり続けて欲しいですね。

地元のためにがんばる大学を誇りを持って応援したい

私は金属が好きで、今、一番注目しているのは、「KUMADAMI グネシウム合金」です。出身大学の名前がついたマグネシウムがあって、地元の企業と協力することで広がりが出て、地域が活性化されるわけですから、そういう研究がされているこ

とに、とてもワクワクしています。新しいものを生み出したり、人を引き付ける新しい研究をしたり、大学にしかできないことを、これからもどんどんやって、地元で産業を興してもえらるとうれしいです。そうした姿が、地方大学の本来のあり方ではないかと思えますし、私が地方大学に最も期待するところです。「うちの大学はこれ」というものを、ぜひ打ち出して欲しいですね。

地方大学って、地元の人から信頼され、地元のために何かやってくれると期待されていると思うんですね。そして、絶対に地元からなくなっては困るものだから、がんばって欲しいんです。

私は、「何かすごいものがあるのよ」って宣伝するお手伝いしかできませんが、微力ながら誇りを持って応援したいと思っています。



発見！国立大学

MUSEUM & CAMPUS

国立大学には、最新設備を持つ建物や過去を伝える歴史的建築、緑豊かな自然など、訪れたい場所がたくさんあります。今号では、各支部おすすめの場所を紹介します。



戦争の記憶を伝える 陸軍駐屯地跡のキャンパス 奈良教育大学 (近畿支部)



奈良教育大学高畑キャンパスは、旧日本陸軍奈良連隊の駐屯地跡にあり、レンガ造りの糧秣庫(食料倉庫)や、星章をあしらった鬼瓦が特徴の弾薬庫などの建築物を保存しています。これらは、当時の様子を知るための貴重な資料です。

例えば、附属小学校では、地域教育フィールドワークの一環として、児童や保護者を対象にした見学会などでここを訪れ、歴史教育の教材として利用しています。また、糧秣庫は「学術情報教育研究センター教育資料館」として、当時の教科書や教員など、学制発足以降の奈良県下の初等中等教育を中心とした教育関係資料を公開しています。

この他に、同資料館は、大学の研究成果の発表の場ともなっています。かつての糧秣庫は、現在資料館として利用されている。



学内で育てた杉を使用！ 自然を生かす「エコラボ」 東北大学 (東北支部)

「エコラボ」は2010年にオープンした、東北大学大学院環境科学研究科の新校舎です。この木造建築には、地産地消の観点から、農学研究科の演習林から計画的に伐採された、樹齢約50年の杉材と、東北地域の木材が使われています。

また、自然エネルギーを効率的に生かすために太陽光発電・蓄電設備や微小電力活用システムなどが導入されており、同大学の研究成果が応用されています。

自然と最新技術が融合したエコラボは、環境問題解決に貢献できる人材育成を目指す同研究科を体現した建築です。

エコラボは、スタッフの案内により、誰でも見学することが出来ます。



無垢材を用いた外観(左)と自然光をふんだんに取り入れた内部(右)

能登半島を中心とした 独自の地域研究拠点 金沢大学 (東海・北陸支部)

金沢大学は、高等教育機関がない能登で、さまざまな教育・研究・社会貢献活動を展開しています。

同大学は、活動拠点として能登半島の先端に「金沢大学能登学舎」を設置し、世界農業遺産「能登の里山里海」を保全・活用する人材を養成しています。ここは、世界の黄砂研究者が集う観測拠点でもあります。



黄砂観測のための気球(上)と廃校を利用した能登学舎(左)

また、能登の九十九湾にある「環日本海域環境研究センター臨海実験施設」も、教育関係共同利用拠点として、「総合的日本海域環境学」などの講義・実習を全国の大学に提供しています。



国際色豊かなキャンパスの象徴 円形回廊 東京外国語大学 (東京支部)



東京外国語大学のキャンパスを初めて訪れる人の注目を最も多く集めるのが、キャンパスの中央に配された円形回廊です。

この回廊は、講義が行われる研究講義棟や附属図書館、異文化交流施設であるアゴラ・グローバル、アジア・アフリカ言語文化研究所など、同大学の主要な施設をつなぎ、キャンパスの基点となっています。

大学祭「外語祭」では、新入生を中心とした学生が、専門で学ぶ26の言語ごとに分かれ、円形回廊に各国・地域ゆかりの料理を振る舞う「各国料理店」を設置し、大変な盛況を見せます。

大きな円を描き、キャンパスをうまく円形回廊



明専アーカイブ（上）と明治専門学校時代の実験機械（下）

技術者教育の歴史を伝える 「明専アーカイブ」と機械群 九州工業大学（九州支部）

九州工業大学戸畑キャンパスの「明専アーカイブ」は、創立当初から現在までの同大学の貴重な資料を展示する資料館です。建物は、グッドデザイン賞やBEELCA賞を受賞しています。

屋外には、前身の明治専門学校時代から実習や研究に使われ、現在はその役目を終えた数々の実験機械が展示され、日本の工業発展に寄与してきた歴史を今に伝えています。これらは、創立当初から現存する正門や守衛所とともに、経済産業省より「技術者教育に係る近代化産業遺産」として認定されました。



次世代に技能を伝える 「ものづくり基盤センター」 室蘭工業大学（北海道支部）

室蘭工業大学の「ものづくり基盤センター」は、ものづくりに関する実践的な教育、基盤技術研究、地域交流を目的に、2006年に設置されました。

同センターでは、小中高生が対象のものづくり体験教室を開催しています。オリジナルキーホルダーやジンギスカン鍋、風鈴の製作などを通し、学校の授業と実際のものづくりがどのように結び付くかを分かりやすく伝え、理系の面白さともものづくりの楽しさを体感してもらっています。

この他に、工作機械の使用方法からものづくりの技術



ジンギスカン鍋の製作を習う小学生

までを学べる技術講習会や、社会の第一線で活躍する講師を招いて開催するテクノカフェ、講演会、シンポジウムなども実施しています。



高校生が 「植物工場」で 最新「農業研究」を体験 山口大学（中国・四国支部）

山口大学は、「植物工場プロジェクト」に取り組み、2010年度に高度な環境制御が可能な植物工場を開設しました。「植物工場」とは、照明や水、温度などを管理して無農薬で農作物を育てる施設のことです。同大学は、2011年度から、高校生を対象に、最新機器を使った実験・実習の体験プログラムを実施し

ています。光合成の測定や野菜の収穫作業などを通して、参加者は植物工場研究の面白さを体験できます。2012年度には、植物工場実証施設（第二植物工場）を開設し、「植物工場シンポジウム」を行いました。今後も「人・技・もの」を結び付け、人材育成や食料にまつわる社会的課題に取り組みしていきます。



最新の技術を使った研究を体験する高校生

キャンパス内の里山を散策！ 自然探索路「緑の小道」 上越教育大学（関東・甲信越支部）



「緑の小道」(右の矢印部分)と小道のジャングルジムで遊ぶ園児(左)



上越教育大学のキャンパスには、かつて人々の生活の場だった里山が保全されています。同大学は、里山内に自然探索路「緑の小道」を整備し、自然環境学習に利用しています。

長年、人の手で利用・管理されてきた里山には、人間の生活とかがわりが深い動物が多く、学習素材としての魅力にあふれています。緑の小道で、子どもたちと自然に親しむ自主活動「学びのひろば」に参加する教員志望の学生は、この里山で将来のための経験を培っています。

この他に、緑の小道は、小学校の総合学習や附属幼稚園の遊びの場としても利用されています。

今、学生は!

カフェで交流の輪を広げ 地域をもっと盛り上げる

宇都宮大学 大嶋悠也さん

宇都宮市のユニオン通りにある「cafe KANMAS」(カフェ・カンマス)は、宇都宮大学の学生によって運営されています。代表である大嶋悠也さんは、人と人とのつながりがカフェの営業にとって何より大切だと実感しています。

方言を用いた店名に
願いを込める

—なぜカフェを始めたのですか?—

「cafe KANMAS」は、僕が2011年に受講していた「プロジェクト研究」という授業の環境で立ち上げました。学生が地域

貢献プロジェクトの企画・運営を行う授業なのですが、ちょうど宇都宮市が「学生による空き店舗活用事業」の募集しており、教授に勧められ、応募することになったのです。

応募に当たって、いろいろな案が出たのですが、交流促進の場と



木材のカットから仕上げまで、すべて自分で行ったカウンターとテーブル



おおしま ゆうや
大嶋悠也
宇都宮大学教育学部
総合人間形成課程環境創造領域4年

して地域を活性化できる、飲食店にすることにしました。本格的な料理を出すのは難しそうだったので、最終的には飲み物とデザートを出すカフェに決められました。

審査通過後、2カ月程で改装などの準備を行い、2011年の12月に開店しました。店名の「KANMAS」は、僕の出身地の栃木県大田原市の方言で、祖父母がよく使う「かんます」という言葉から付けました。「かんます」には、「かき混ぜる」や「平らにする」といった意味があり、いろいろな人が訪れ、交流が育まれるような「地域をかんます」お店にしたいという願いを込めています。

—お店はどのように運営しているのですか?—

応募する企画書を作成する時点では、プロジェクト担当者13人でアイデアを出しましたが、実質的な運営は僕が主となり、あとはプロジェクト研究の授業を受講して

いる下級生や他学部の学生に声を掛けるなどし、カフェの運営に参加してもらっています。

お店は、毎週火曜から木曜と日曜の午後にカフェとして営業する他に、週1回、イベントを開催しています。中でも、「まちなかゼミ」は人気のイベントで、毎月開催しています。参加者は学生や社会人で、毎回さまざまなテーマで、町や地元のためにできることをみんなで話し合います。例えば、宇都宮市中心街地の活性化をテーマに、中小企業診断士に講義をしてもらったこともあります。

また、商店街の他店舗と合同で「ナイトギャラリー」というイベントも行いました。この時は、近隣店舗の画材店と雑貨店が、お店やギャラリーで作品を展示する間、休憩所としてお店を提供しました。この「ナイトギャラリー」が縁で、切り絵作家の作品展を「KANMAS」で開催しました。



切り絵作家の作品展では、来場者が切り絵を体験できるワークショップも行った
(写真提供/倉田恵)

コーヒーは、カフェで働く知人に習ったやり方で丁寧にいれる(右)。デザートは、食材によって臨機応変に作る。この日に作ったのは、オレンジのクレープシュゼット(下)



イベントを通してお店の常連になってくれるお客さんも多く、お客さんの提案で健康に関するイベントを開催したこともあります。イベント後は、お客さん同士の交流時間を必ず設けるようにしています。お客さん同士で交流の輪が

内装や家具には、お客さんがゆっくりくつろげるように木材を多用している



広がっていきなりすると、わずかでも地域を動かしていると実感でき、とてもうれしいです。

行政と地元商店街のギャップに気付く

——「KANMAS」を通して、どのようなことを学びましたか？

行政と地元の地域活性化に対する考えの違いに気が付きました。行政がまちづくりに熱心な一方で、地元では今まで通り生活が成り立ってば、無理して盛り上げる必要はない、と思っている人が少なくありません。僕はカフェを始める前から、まちづくりに関心があったのですが、どちらかというと行政側の施策に興味がありました。でも今は、行政と地元のギャップを埋めるのに役立つような研究がしたいと思っています。

宇都宮大学は、地域密着型のカリキュラムが多く、特に僕が所属する教育学部総合人間形成課程は、机上の勉強だけでなく、教室の外で実地に学ぶ、ユニークな授業が多いです。「プロジェクト研究」の授業がなかったら、この「KANMAS」を運営することもなかったですし、「KANMAS」を通して、ものの考え方や興味の範囲が随分広がったので、この学部ですべて良かったと思います。

——今後の目標を教えてください

卒業後は大学院に進み、学生によるコミュニティカフェで、どの

ようなことができるか、その可能性について探っていく予定です。「KANMAS」の今後についても考える必要があります。現状では、市の助成金を受けていますが、いずれはそれなしでも経営が成り立つようなビジネスモデルにしていかなければなりません。

僕は約1年このお店をやって、最近ようやく商店街の近隣店舗やお客さんとの関係が深まってきました。本当に地元で密着して、地域を活性化するためには時間が掛かります。ですから、僕が社会に出る時には、こうしてできた地元との関係を維持し、お店を発展させられる人に引き継ぎたいです。

このまま学生主体でやっていくのか、地域の人に協力してもらう方がいいのか、まだ模索中ですが、「KANMAS」が地域を盛り上げるお店であり続けられる方法を見つけないと思っています。



お店の前でこの日のスタッフと。手に持つのは、大嶋さん手作りの看板

JANU Quarterly Report Vol.27 December 2012

編集・発行／一般社団法人 国立大学協会
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-1-2
TEL:03-4212-3506

表紙：女優
宮崎美子

撮影：東京藝術大学 美術学部准教授
鈴木理策



一般社団法人 国立大学協会

The Japan Association of National Universities

<http://www.janu.jp/>